



「認知症患者への社会の理解を深めて欲しい」と話すたけのこ幹事 竹内弘道さん

「認知症のかたは社会とのつながりが大切」「症状に合った適切な治療と介護が必要」。認知症への偏見をなくしてもらい、地域社会と共生できるよう理解を深める活動を進めている目黒認知症高齢者と家族の会「たけのこ」。その幹事、竹内弘道さんや、家族、そしてボランティアの皆さんは、異口同音に「周りの人が認知症の人を障害をもつ人としてケアしていくことが重要」と訴えています。



▲交流会で、ボランティアの演奏に併せ、手を叩き、懐かしい歌を口ずさんで楽しむ「たけのこ」の会員

目黒認知症高齢者と家族の会「たけのこ」

平成10年から自主活動を続けている認知症の家族会で、月2回の「ミニデイサービス&家族交流会」などを開催しています。認知症の知識や情報を得て、仲間作りをする場として、認知症の人と家族の支えとなっています。

このほか、認知症啓発・介護者交流イベント「たけのこ広場」を年に一度開催するほか（19年は9/30日（日）13:30から中目黒GTホールで開催）、折々の「認知症介護セミナー・学習会」なども開催しています。

前に亡くなった母親のことなど昔のことはよく覚えています。去年あたりから忘れっぽくなり、この会に来ると仲間と話して楽しそうに言います。そのうえで「夫の行動が超スローですので、私を含めて周りの皆さんがイライラしないで認知症への理解を深めていただければありがたい」と話します。また、10年近くボラ

目黒認知症高齢者と家族の会「たけのこ」会員に聞く

欠かせぬ社会とのつながり

前にも書いたように、認知症の人は、周囲の偏見をなくして、地域社会とのつながりを深めていくための考えを次のように話してくれました。「認知症はだれにでも起こりうる病気だ」ということを、医療関係者などが家族や地域社会にきちんと伝え、周知してい

▲素敵なカレンダーが完成しました



炎暑のつづく8月中旬、中目黒スクエアに「たけのこ」の会員や区の保健師、介護ボランティアなどが次々と集まってきました。その数、およそ30人。

この日は切絵カレンダー作り挑戦です。家族やボランティアに手伝ってもらいながら、カレンダー用紙に曜日に合わせて

暦の数字を書き込んでいきます。「9月は30日までだった?」「あれ、日にちがだぶっちゃった」など、皆さん和気あいあいとした雰囲気の中、楽しそう。余白に自分の好きな車の絵を張ったり、花の絵柄を張り付けたりして、1時間ほどで思い思いのオリジナルカレンダーを作り

上げました。そのうちの一人、永澤瀧雄さん（83）。現役時代は仕事の関係で関東以北の山に登ることが多かったそう、「登山が大好き」。2年ほど前から参加していますが「交流会が楽しみ」と顔をほころばせます。付き添ってきた妻、タカ子さんは「30年

ボランティアとして「たけのこ」の活動に協力している村上歌子さんは「友人に区の保健師がいたことや、母親などの介護体験を通して、介護の大変さと先が見えない不安を感じたことから携わるようになりました。そして「順番でだれでも、いつかは身内なり他人なりの世話になる。自分のためでもあり、社会のためでもあり、こうしてお手伝いできるのは幸せだと思えます」とも言います。

一方、自身が94歳の認知症の母親、伊代さんの世話をしている「たけのこ」の幹事・竹内弘道さんは、「母は17年前から発症。7年前に足の骨を折ってからは車いす生活になりました」と前置きしながら、認知症への偏見をなくして、地域社会とのつながりを深めていくための考えを次のように話してくれました。「認知症はだれにでも起こりうる病気だ」ということを、医療関係者などが家族や地域社会にきちんと伝え、周知してい

くことが大切。そのうえで症状に合った適切な治療と介護が必要です。認知症はゆっくりと進行していきます。ですから、障害をもつ人として周りの人がしっかりケアしていくことが大事。かといって、外に出そうとできなかったり、困り込んだりしてはだめです。社会とのつながりを持てるよう、行政やボランティア、家族らが手を携えていけば、認知症の人もそれぞれのペースでゆったりとした日常が送れるようになると思います」



▲▼ボランティアに手伝ってもらいながら、切絵カレンダー作りに挑戦

